



『金子みすゞ み仏への折り』（詩と詩論研究会著  
勉誠出版）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 比呂己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/8686">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/8686</a>

『金子みすゞ み仏への祈り』(詩と詩論研究会著 勉誠出版 平成二十三年(二〇一一)四月 全二二四頁)

北海道教育大学釧路校准教授

佐野 比呂己

「詩と詩論研究会」(以下「研究会」と略す)のみすゞを視座として、の研究書は本書が十一冊目となる。会員の方々の努力に大いに敬服する次第である。

研究会はみすゞ作品への問題意識について次のように記している。

金子みすゞの作品は、すでに生誕百年が過ぎたにもかかわらず、多くの読者に愛読されている。金子みすゞの詩は、なぜ読まれ続けるのか。私たち詩と詩論研究会は、この謎解きを常に心掛けてきた。

今回は、みすゞの(み仏への祈り)をテーマとし、みすゞの慈悲深い菩薩のような心、その人間性の優しさなどについて考察している。

本書の目次は次の通りである。

はじめに

金子みすゞの詩にみる構造

— 二項対立を超えた荘嚴世界 —

金子みすゞあれこれ

彼岸へから／への眼差し

《小説》神さまは小ちやな蜂のなかに

金子みすゞの宗教性 — その詩を支えるもの —

金子みすゞ、菩薩の心と浄土願求

— そして(天逝)した文学者たち —

《小説》いのちとこのころと、ゆめとうつつを謡い続けた不世

出の童謡詩人

金子みすゞの詩を墨絵で書く

金子みすゞ肖像画

志村有弘

小澤次郎

鈴木俊

館下徹志

崎村 裕

槌賀七代

志村有弘

西村 啓

柿木原くみ

水戸部千鶴

ここでは、館下徹志(現・釧路工業高等専門学校教授)の「彼

岸へから／＼の眼差し」に着目する。

館下はみすゞの詩を次のようにとらえる。

金子みすゞは、日々の暮らしが営まれるところから遠く離れた、手の届かない、目に見えない世界への憧れを抱いていた。その世界では、あらゆるものが等しく見守られ、祝福される。

「日々の暮らしが営まれるところから遠く離れた、手の届かない、目に見えない世界」を〈彼岸〉とし、〈彼岸〉を想像するみすゞ



の詩は、だれにもわからない、不思議なこと、心惹かれることに未知の異界を形作るとしている。

例えば、小中学校国語教科書に掲載されている「不思議」という詩がある。〈彼岸〉に在る「誰」にとつては〈彼岸〉の「不思議」は「あたりまへ」のことになる。〈彼岸〉を〈彼岸〉から見ると、何もかもわかつた気になっている〈彼岸〉の「誰」のうぬぼれが愚かしく映る。その〈彼岸〉の「誰」の中にみすゞもいることを表現の出発点としていると館下は論じる。みすゞの心のかけ方は〈彼岸〉からふりまかれる「愛情の模倣」と述べるのであった。

〈彼岸〉からの眼差しと〈彼岸〉への眼差しとが交わるところに、「見えぬけれどもあるんだよ、／見えぬものでもあるんだよ。」「『星とたんぼ』』という、聖なる詩境は結実したのである。

みすゞの詩はみすゞが〈彼岸〉と向き合うことを通して、表現されたものであったとするのである。

この〈彼岸〉、〈彼岸〉の視点からみすゞの詩を読み直すと、みすゞの詩の魅力がいつそうひきたつと考えるのは評者だけだろうか。

〈彼岸〉に住む評者が、みすゞの世界に惹かれるのは、〈彼岸〉から〈彼岸〉をみることで自省すること、〈彼岸〉の未知で「不思議」な世界への憧憬が生ずるからなのであろう。